

# 令和5年度 梅田小学校 校内研究成果報告

大田区立梅田小学校  
校長 金高 俊哉

## 1 研究テーマ 「個別最適な学びと、協働的な学びの授業づくり」

副題～主体的な学びを生み出す FACTOR 探しの旅～

## 2 研究主題設定の理由

これまで、本校では、一人1台端末の日常的に活用するための方策を研究してきた。その結果、児童のタイピングスキルも向上し、意識しなくても日常的に端末を活用する姿がみられるようになった。今年度は、今までの研究成果を活用しながら、授業改善を図るために、新学習指導要領に則って、「令和の日本型学校教育」を研究していくこととした。

「令和の日本型学校教育」の重要なキーワードとして、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」がある。そこで、個別最適な学びと、協働的な学びの実現をテーマとして研究すすめることとした。今年度は、授業改善、授業設計を大きな狙いとして、児童が主体的に学習に取り組むためのファクター（要素）を探し、授業（単元）を開発することとした。

## 3 研究計画

	日程	内容
研究全体会①	4月26日(水)	今年度の研究について
研究全体会②	5月24日(水)	講演会 講師 茨城大学 准教授 小林祐紀先生
研究全体会③	7月5日(水)	授業の視点や研究主題などの共通認識を語る。
研究全体会④	9月20日(水)	実践授業①（2年生） 講師 放送大学 特任教授 佐藤 幸江先生
研究全体会⑤	10月18日(水)	実践授業②（3年生） 講師 放送大学 特任准教授 倉澤 昭先生
研究全体会⑥	11月24日(金)	実践授業③（5年生） 講師 茨城大学 准教授 小林 祐紀先生
研究全体会⑦	1月26日(金)	実践授業④（4年生） 講師 茨城大学 准教授 小林 祐紀先生
研究全体会⑧	2月9日(金)	実践授業⑤（1年生） 講師 船橋市立宮本小学校 校長 秋元 大輔先生
研究全体会⑨	3月5日(火)	研究のまとめと次年度の研究について

4 研究構想図

大田区立梅田小学校 令和5年度研究構想図

新学習指導要領(平成29年告示) 令和2年度全面実施

文部科学省 中央教育審議会

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して  
～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)

東京都教育大綱 東京の目指す教育

「誰一人取り残さず、すべての子供が  
将来への希望を持って、自ら伸び、育つ教育」

おおた教育ビジョン

「豊かな人間性をはぐくみ、  
未来を創る力を育てる」

大田区立梅田小学校 研究推進委員会長期目標

「Society5.0に向けた梅田小の教育」

令和5年度 校内研究主題

個別最適な学びと、協働的な学びの授業づくり

～主体的な学びを生み出す FACTOR 探しの旅～

*FACTOR* とは、(ある現象、結果を生ずる)要因、因子、原因

～ 主 題 に 迫 る 研 究 計 画 ～

FACTORの分類・整理

教材研究

研究の焦点化

研究授業・研究協議会での  
検討・協議・改善

研究の視点

- ① 児童にとって主体的な学びになっているか。
- ② 児童にとって効果的な対話的な学びになっているか。
- ③ 児童にとって、深い学びになっているか。

## 5 研究内容

1学期は、講師を招き「個別最適な学びと、協働的な学び」についての基礎を学ぶとともに先進校の実践を集めるなどの先行研究を行った。この結果、「活動や進度自由度」、「魅力的な教材との出会い」「魅力的な目的（ゴール）の設定」などいくつかの重要な要素が浮かび上がってきた。

2学期からは、先行研究を生かした実践研究を各学年で行った。講師から、児童の主体的な学習を誘発するためには、「探求型学習」が重要であるという教えを受け、生活科や「総合的な学習の時間」での探求的な学習の単元開発を行い、研究授業を通して、主体的な活動を誘発するファクターやそのための教師の役割について議論を深めるとともに講師の指導を受け、多くのことを学んだ。

例えば、5年生では総合的な学習の時間において「馬込伝統野菜 PR プロジェクト」という単元を開発した。この地区の伝統野菜である「馬込三寸ニンジン」「馬込半白キュウリ」を栽培するとともにその野菜を使ったレシピを考え、それを地域のお店の方に見てもらい優秀作品を選んでもらうという活動を行った。プロの方に選んでもらうという点は、子どもたちの意欲を掻き立て、どの児童も熱心にレシピづくりに取り組んだ。

選ばれたレシピは、期間限定でお店の商品として販売してもらったり、地域のお祭りで出品してもらったりすることになった。子どもたちは、自分たちで考えた方法で、そのレシピのPRを考えた。自分たちの代表のレシピが商品化されることもあって、子どもたちは熱心にPR活動に取り組んでいた。このような「魅力的な目的」を設定することで、子どもたちの主体的な活動は促され、様々なアイデアが生み出された。どうすれば、効果的にPRすることができるか、子どもたちは自然と話し合いを重ね、それが協働的な学びとなった。

4年生では、5年生のこの活動につながる「つないでいこう！～江戸東京野菜のみりょく～」という単元を開発した。「江戸東京野菜」について調べ、まとめたことを発表するという活動である。

この単元においては、探究のサイクル「情報の収集」や「まとめ」において、自己選択型学習を取り入れる。児童一人一人に合った学びを提供できるような活動形態にした。

- ・多様な学びのスペースを設け、自分に合った学びの環境を自己選択できるようにする。
- ・自ら計画する力を育むために児童自ら、学習計画を作成や修正をする。
- ・児童一人一人が主体的に学習を進めていくために、学習計画を提示する。その際、学びのポイントを提示することで、効果的な学びにする。

など、教師が学習環境を整備することで、子どもたちは、自分のペースで自分に合った形で学びを進めていった。自分一人では、学びを進めることが難しい子どもについては、

- ・指導者に相談できる場所、友達と意見交換できる場所、友達の助言を求める場所等のスペースを設け、自身の学習状況に合わせて選択・活用できる環境を構築する。
- ・自力で学習を進めることが著しく困難な児童には、指導者が用意したパッケージやテーマから調べる対象や、活動内容を選択させる形で、自主決定の場面を作る。

などの支援策を考えて、活動に臨んだ。

子どもたちは、それぞれ自分に合った場所やペースで学習を進めた。一人で黙々と課題に取り組み子、グループになって相談しながら取り組む子、先生のところに相談に行く子など、教室内外で意欲的に活動をしていた。このように教師が学習環境を整え、子どもの活動をサポートする形をとることによって、想像以上に子どもたちは、自分にあったペースで学習に取り組み、意欲的に課題に取り組むことが分かった。

他の学年においても、一定の条件下において、子どもたちの主体的な活動が随所に見られるなど、ファクターが、ある程度、抽出することができた。

## 6 研究の成果と課題

年間の研究を終えて、児童が主体的に学ぶためのファクターを明らかにすることができた。大きく分類すると、「自己」・「他者」・「学習形態、活動場所」「活動・教材」の4つに分類され、それらが相互に関連することで、児童が主体的に学習に向かうことが分かった。また、それらのファクターを組み込むための教師の役割も明らかとなった。(下図表参照)

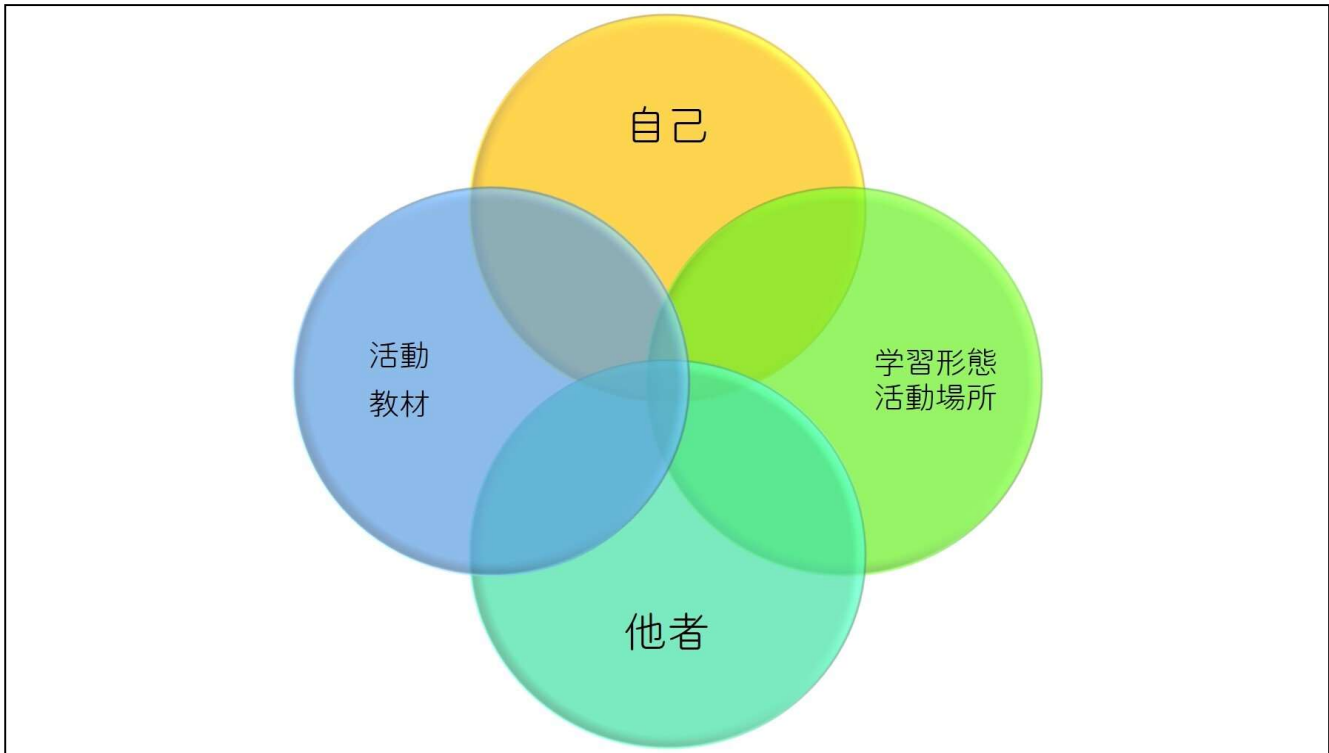


図1 ファクターの関係性

表1 ファクターの分析

	学習者にとっての要因	指導者の役割
自己	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内発的な動機付けを誘発</li> <li>・見通しがもてる</li> <li>・自己選択できる</li> <li>・自分たちで追究したい内容や方法を定める</li> <li>・自分たちで単元計画を立てる</li> <li>・視点を明確にしたふり返り</li> <li>・毎時間の自己評価</li> <li>・成長が実感できる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童に身近な素材を提示</li> <li>・教材への出会いの工夫</li> </ul>
他者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペア学習やグループ学習を取り入れた学び合い</li> <li>・学習の見通しの共有</li> <li>・探究型から発信型へ移行する際の相手意識</li> <li>・単元内での他己評価</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・場の設定</li> <li>・学習環境づくり</li> <li>・ゲストティーチャーの活用</li> </ul>
学習形態 学習場所	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分自身に合った学びの場の選択</li> <li>・ゲストティーチャーの活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学びの場を整えて提供すること</li> <li>・児童が自己調整を行いながら計画を立てて学習できるような支援</li> <li>・児童が話し合いたいと感じた時にいつでも話し合える環境づくり</li> </ul>
活動 教材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内発的動機づけにつながる仕掛けに食いつく</li> <li>・学びの場の設定</li> <li>・粘り強く取り組む姿勢</li> <li>・自分のペースで取り組むことができる活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内発的動機づけにつながる仕掛けを撤く。</li> <li>・単元内自由進度学習の実施</li> <li>・資料（本やインターネットサイト等）の提供</li> <li>・学びたいと感じる単元設定</li> <li>・予想を裏切るような資料の提示</li> <li>・教科横断の学習展開</li> <li>・単元の魅力的・発展的なゴールの提示</li> <li>・思考ツールを用いた児童の思考の促し</li> </ul>

これらの要素を加味して単元や授業を設計することによって、「令和の日本型学校教育」の大きなねらいでもある、「個別最適な学びと、協働的な学び」が実現できることが、実感として理解できたことは、今年度の大きな研究の成果と言える。また、「個別最適な学びと、協働的な学び」を行う上で、「探究的な学習」が重要であることや「児童主体の自由進度学習」も重要であることが明らかとなった。

総合的な学習の時間や生活科は、探究的な学習を取り入れることが容易であり、比較的単元設計も行いやすかった。

今後の大きな課題としては、国語や算数などの教科において、どのように「探究的な学習」「自由進度学習」を取り入れていくのか。そのためのカリキュラムマネジメントをどのようにしていけばよいのかということがある。「教師が教え込む学習」から「児童が学び取る学習」への変換が求められ、教師の意識改革も必要となり、そこも課題といえる。

また、「個別最適な学びと、協働的な学び」「児童主体の探求的な学び」を進めるためには、「課題発見」「資料の読み取り、分析」「対話・話し合い」「整理」「発表」などの児童個々のスキルが必要になることも明らかになってきた。こういった力を学校全体としてどのように意図的、計画的に育てていくのかも大きな課題として残されている。

次年度以降、このような課題を解決すべく、さらに研究に取り組んでいきたいと考えている。